舞踊教育における学習内容の客観化について
—Observational Record作成に向けて—

木　村　はるみ

本研究は舞踊教育の中に「運動観察（Movement Observation）という」学習内容を導入する試みである。体育やスポーツの領域で「わかる」と「できる」が技術に対する理解と実践能力として評価の対象としても討議されるように，舞踊教育の中でもこの二つの視点から総合的に学習内容について考えてみたい。

本来，直観的であったり，陶酔的であったり，個人的体験であったりする舞踊の特色があるけれども，教材として扱われる際には，舞踊の論理よりは教育の論理として，より学習内容が明確となる事は結果として舞踊の本質的理解と矛盾する事にはならないだろう。

「鑑賞」学習から「観察」学習へ

舞踊教育の学習内容は一方で「運動学習」としての性質をもち，もう一方で「表現学習」としての性質をもっている。また，「つくる」－「おどる」－「みる」という一連の学習課程の中で「みる」学習については「鑑賞する」といった意味合いが強い。しかし，こうしたプロセスを通して「見る」ことの位置を，もっと一貫した学習内容として，「鑑賞」よりは，「観察」として強化することは運動と表現の両側面に対する理解を深める事につながらないだろうか。これは決して鑑賞する学習が主観的過ぎると批判している訳ではない。むしろ，逆に鑑賞は思いっきり主観的であっても構わないのではないかと思う。個人の好みや美意識は尊重されることが望ましい。しかし，感動に惑わされる事なく物を見る目や運動を見る目を養う事はひいては人間の探求と理解につながるだろう。自分の動きや他人の動きに対して客観的にかかわる態度を学習する事を通して，初心者においては作品や身体を見られる羞恥心に何かしらの心的援助となるだろう。またすでに，いくらか進んだ者にとってはより動きに対する興味と挑戦意欲が広がるかもしれない。

感情の身体化としての人間の動きを観察する

舞踊の学習にはいる前に，日常の人間の動作についての理解を持たせる事は，表現の理解につながるだろう。「マン・ウォッチング」や「ボディランゲージ」に見られる人間観察である。表情や身体はコミュニケイションの道具として日常で頻繁に使われているからである。また，人間の発話における声の変化や強度，会話における間，抑揚など「何を（What）」言ったかよりは，「どのように（How）」言ったかに注目し発話者の意図を探ろうとすると舞踊にもつながる表現の諸相が見えて来る。言葉はロゴス（理性）の支配をうけるけれども声は感情とつながっているからである。たとえばオノモトピア（擬態語）からの学習が有効なのはこうした感情教育的なロゴスによらぬ教育の在り方につながるからである。

スポーツ種目の達成すべき目標が技術の身体化であるならば舞踊教育ではまず感情の身体化が，その目標としてあげられるのではないか。自分の身体はものを語っているだろうか。友人の身体は何を語ろうとしているのだろうか。そしてわれわれは身体で「どのように（How）」語る事ができるのか。こうした身体による語り方を学習する中での記録の在り方は，単なる運動の記録であってはならないだろう。なぜなら，あくまでも良く動く身体ではなく目標とする感情の身体化の技術に向かっているかどうかが問われるからである。換言するならば表現の意図に即してその運動は初めて意味をもつ。しかし，鑑賞者は表現というよりは身体運動そのものに感動してしまうものである。この表現を見る事と身体運動を見る事の間に運動を見るという中間項をいれることによって，より舞踊教育の分野で対象とすべき表現的運動と主体（学習者）とのかかわりが明確にならないだろうか。

観察記録（Observational Record）の作成

それでは表現運動にふさわしい観察記録とはどうあるべきなのだろうか。たとえば，スポーツにおける「ゲームの記録」のようなものを作成できるだろうか。また既存の記録方法やスコアーの作り方をそのまま現場で使えるものだろうか。どのような情報が読み取れるスコアーにすべきであろうか。いずれにしても分析的な視点を導入することが必要となってくる。以下簡単にその諸相をあげてみたい。

・プラグマティクスにおける文脈の尊重
　（全体の時間の流れにそって現れてくる運動を記録していること）
・ポスチャーとジェスチャーを見る
　（全身と身体各部位の両方の運動について情報があること）
・見ながら記入できること
　（観察学習のための教材であること）
・エフォート分類のような質的要素の意識化
　（速／遅・重／軽・直／曲を視覚で捉える）

ref）North Marion；Personality Assessment